

## 『最悪の予感 パンデミックとの戦い』

マイケル・ルイス 著 中山宥 訳 早川書房 2,310円(税込)

機能不全の組織，危機を解決するのは？

会員 木山 悠 (62期)



本稿の依頼を受けて、映画にするか書籍にするか悩んだが、いずれにせよ当初頭に浮かんだ作品は、「マネー・ショート」(原題: The Big Short) だった。2008年9月以降の世界金融危機について、2年以上前に、これを予見したファンドマネージャーやトレーダーが主人公のノンフィクションの映画化である。

映画の原作の著者、マイケル・ルイスは、投資銀行でのトレーダー経験があるノンフィクション・ライターであり、映画化された作品も多い。その中でも、映画「マネー・ショート」はお勧めしたい作品であるが、すでに色々な映画評が出ていることもあり、悩んだ末、本稿では、映画ではなく同じ原作者の新作を扱うことにした。

著者は公衆衛生の専門家ではないが、「マネー・ショート」において金融システムの腐敗・墮落を描いたのと同様、本作では、アメリカの連邦政府における公務員の政治的任用(猟官制)の結果として前政権のデータや専門的知見の承継が断絶され、パンデミックの危機において連邦政府が機能不全となる様を浮き上がらせている。

ジョージ・W・ブッシュ政権からオバマ政権下で任用されていたホワイトハウスの感染症対策の専門官はトランプ政権下で職を解かれ、蓄積された専門的知見を生かすことができず、連邦政府の「疾病対策センター(CDC)」もトップが政治的任用のため政権の顔色を窺い、対策機関としてではなく調査研究機関に甘んじ、新型コロナウイルスへの対応は後手に回っていた。トランプ前大統領の元側近が、「過去15年間パンデミックについて考えてきた人たちが、誰ひとり表舞台に出てきません。トランプ政権の弱体化を図る“ディープステート”の一味とみなされたのです」と指摘する通り、

ホワイトハウスは人材不足に陥っていた。

そこで前政権以前のホワイトハウスにいた元専門官らが、非公式のグループとして叢智を結集し、いち早くパンデミックの拡大状況を推計し、連邦政府ではなく州の担当者と連携をとって対策に動く。その時、鍵を握るカリフォルニア州の担当者が、本書のヒロインである州保健衛生局の局長補佐のチャリティー・ディーン医師である。組織の論理に与せず、パンデミックの阻止だけを目的に上司やCDCに直言し、周囲との対立を厭わず状況の正確な把握や対策を推し進め、ついに州だけではなく、国全体の計画書をまとめてホワイトハウスに提出する。その姿には、彼女が置かれたL6(トップから6つの階層「Layer」を隔てた現場を熟知している職員)の人間に、必要だが保つことが困難な矜持が見られる。

本作の中心的なテーマは、「どんな大きな組織でも、危機を解決するのは、おおよけに重要な地位を占める人物ではなく、組織ピラミッドのずっと下にいる無名の従事者であることが多い」との一文に現れている。それにもかかわらず政治の専横がそうした従事者の経験や成果を無視し、自ら国家的危機を招くことを鋭く描いているのだ。

私自身、内閣府で働いた経験があり、その頃、内閣人事局など政治による官僚への支配が進む只中にいた。そこで経験して感じた現場の従事者が時に声を上げることの重要性は、分野は違えども重なるところがある。本作は、日本において、パンデミックを克服するためにも公に重要な地位を占める人物に知ってもらいたい物語であると同時に、機能不全に陥った組織において声を上げるべき従事者の人々を勇気づける物語であり、ぜひ多くの方に読んでいただきたいと願う。